

✠032 ゲーテンベルク聖書

マイnitzの金細工師ヨハン・ゲーテンベルクは活版印刷の試行錯誤を繰り返した末、ヨハン・フストの経済的支援を受けて、1455年頃ラテン語訳「ウルガータ聖書」を印刷した。これが「ゲーテンベルク聖書（42行聖書とも呼ばれる。下記の慶応本は40行聖書である）」である。本格的な書物としては、活字を使って印刷された西洋最初の書物である。その後の人類の歴史には、このゲーテンベルク聖書が直接間接に長く影響を与えた。

印刷術の誕生は、書物の量を増大させ、一部の聖職者だけに限られていた識字率をそれ以外の階層にも普及させた。また聖書の自国語（ラテン語以外の日常生活で使う言葉）への翻訳を動機づけ、1517年、ルターがローマ教会に抗議してヴィッテンベルク市の教会に95ヶ条の論題を打ちつけた宗教改革へとつながっていった。その影響の大きさから、ゲーテンベルクの発明は、しばしば『印刷革命』『ゲーテンベルク革命』とも呼ばれる。

また、ゲーテンベルクの発明で、最も重要なものの一つが、「印刷のための油性（植物油）のインクを生み出した」ことです。それまで、中世の写本を書く写実生が使っていたのは、全部水性の、煤（すす）をもとにしたインクだった。

ゲーテンベルク聖書に使われているラテン語のテキストは、「ウルガータ」（Vulgata：一般に「認められた」の意味）と呼ばれる種類のものである。これは、紀元四世紀末頃に聖ヒエロニムス（Sophronius Eusebius Hieronymus）によって翻訳された、ラテン語聖書を言う。上下巻で1セット、全部で1,300ページ近くあり、縦40cm、横30cmという大きな書物である。上巻には「聖ヒエロニムスの書簡」から「詩篇」まで、下巻には旧約聖書の残り和新約聖書の全ての書が含まれている。

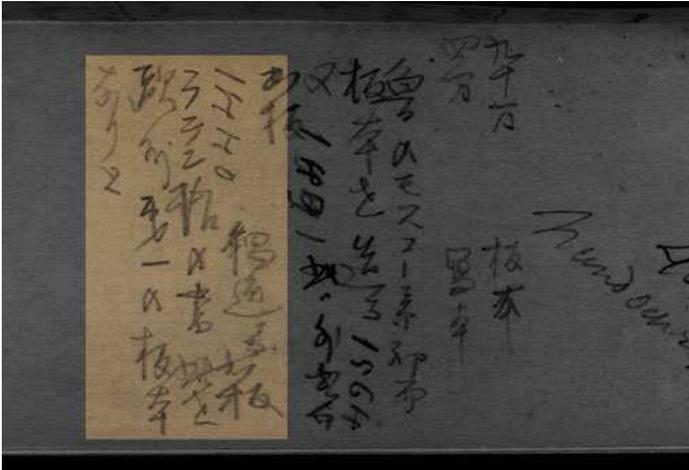
ゲーテンベルク聖書は、全部で180部前後が印刷されたと考えられている。そのうち約四分の一が羊皮紙に、残りの四分の三が手漉きの紙に印刷されたと考えられる。

本の形で現存するものは、羊皮紙に印刷されたものは完本4部・不完全本8部、紙に印刷されたものでは完本17部・不完全本19部で、合計48部である。これらを所蔵する国は、ドイツ14部、アメリカ11部、イギリス8部、フランス4部、イタリア4部、スペイン2部、オーストリア、ポルトガル、ベルギー、デンマーク、スイス、日本、ロシアが各1部ずつである。慶応本は、アジアにある唯一のゲーテンベルク聖書である。

福澤諭吉とゲーテンベルク聖書

1862（文久二）年、福澤は文久の遣欧使節団の一員として、フランスをはじめヨーロッパ各地を訪問した。福澤は弱冠29歳、英学塾としての慶應義塾の前身を創設して間もない頃だった。二年前の万延元年に、福澤は徳川幕府の訪米使節団の「従僕」として、咸臨丸でアメリカを訪問している。訪米使節団の団長は木村摂津守、今回の訪欧使節団の団長は竹内下野守であった。訪米の際は縁故を通じて団長・木村に頼み込んだのだが、ヨーロッパ行きの場合には正式の通訳として採用された。イギリスの軍艦に乗って、香港、シンガポール、紅海、スエズ、カイロ、地中海を通過してマルセイユに上陸、パリに20日間滞在した後、イギリス、オランダ、プロシヤのベルリン、ロシアのサンクト・ペテルブルグ、それからパリに戻ってポルトガル、再び地中海を経て元の航路をたどって帰途につき、帰国したときは出発してからほぼ一年が経過していた。ちょんまげ姿、羽織袴に二本差し

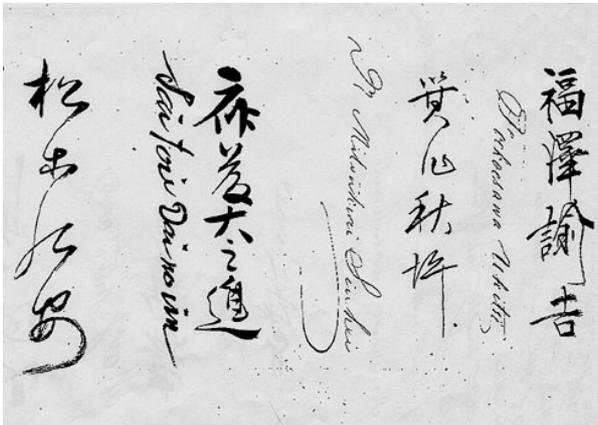
の男たち 40 名ほどの侍姿は、ヨーロッパの人々にさぞ奇異な印を与えに違いない。ヨーロッパ滞
在の間、福澤は現地で買った手帳に、見聞したことを綿密に書き残した（「西航手帳」）。ペテルブル
クに滞在したおりに記入した走り書きには、次のような一節がある。



1440 独逸にて出板／ラテン語の書／此を／欧州第一の板本なりと

当時は、今と異なり、出版・版本には「**板**」という漢字が用いられている。これは元来、板に文字を彫って印刷する木版印刷のことを意味する。もちろん福澤は活版印刷のつもりで用いている。この走り書きから、福澤がロシアのサンクト・ペテルブルク滞在中に「ゲーテンベルク聖書」を目にしたこと推測できる。現在のサンクト・ペテルブルグには「ゲーテンベルク聖書」はないが、1862年当時は確かに「ゲーテンベルク聖書」があったのである。この聖書は19世紀初めまで、長い間ドイツのロッテンブッフ修道院に所蔵されていた。そして政府による修道院財産の国有化政策によって、ミュンヘン国立図書館に移管されたのだが、そこにはすでに他の「ゲーテンベルク聖書」が所蔵されていたので、重複本として1858年に競売に付されたのであった。これを購入したのがサンクト・ペテルブルクの帝室図書館である。当時のサンクト・ペテルブルクは、権勢を誇った帝政ロシアによる都市計画が完成し、その美しさと高い文化でヨーロッパ屈指の都市であった。日本からの遣欧使節団がここを訪れたのは、樺太の領有区分をめぐる交渉のためだったが、結果的に40日を超えた滞在にもかかわらず、交渉は不調に終わった。しかし、遣欧使節団一行はここで大いなる歓迎を受け、市内各地で見聞を広めていった。帝室図書館で収蔵まもない「ゲーテンベルク聖書」が展示されていて、これを福澤が見た可能性は高いと思われる。

実際、調べてみると、**帝室図書館の訪問者名簿に福澤諭吉の署名**が残っているのである。



これには、7名の団員の漢字とローマ字による署名（高松彦三郎、森鉢太郎、山田八郎、福澤諭吉、箕作秋坪、斎藤大之進、松木弘安）がある。

福澤の「西航手帳」には「1440 独逸にて出**板**」云々とある。「ゲーテンベルク聖書」自体には出版年に関する奥付（おくづけ：書物の末尾に、書名・著者・発行者・印刷者・出版年月日・定価などを記した部分）はないが、その完成時期は1455年頃とされている。

この「ゲーテンベルク聖書」を目の当たりにした福澤は、活版印刷の重要性を認識して手帳に書き込んだに違いない。後に三田の慶應義塾の構内に活版印刷所を設け、「**福澤屋諭吉**」と称して出版業を営むんだと言われている。

慶應本の来歴

15世紀から18世紀	マインツの修道院に長く保存されていたと考えられる。
19世紀半ば	ゴスフォード伯爵が所蔵していた。
1878年	ロンドンの書籍業者ジェームズ・トゥーヴィーがこの聖書を含む伯爵の全蔵書を購入した。
1884年4月21日	書籍業者パティック・アンド・シンプソンが競売でこの聖書を購入。ロット番号は339番。落札価格は500ポンドだった。
?	アマスト・オブ・ハックニー卿が購入。購入価格は600ポンド。
1908年12月3日	サザビーで行われた競売で、収集家ダイソン・ペリンズの代理として書籍商バーナード・クオリッチが購入。ロット番号は78番。落札価格は2,050ポンド。
1947年3月11日	サザビーの競売で、フィリップ・フレールの代理としてマグス書店が落札。ロット番号564番。落札価格は2万2,000ポンド。
1950年10月	エステラ・ドヒニー伯爵夫人がマグス書店を介してフレールから7万93.75ドルで譲り受けた。
1987年10月22日	ニューヨークのクリスティーズの競売で、日本橋の丸善が落札。落札価格は490万ドル。手数料を含めると539万ドル（7億8,000万円に相当）で、印刷本の落札価格としては当時の世界最高記録を更新した。
1996年3月	慶應義塾大学が丸善より購入（約8億円） 。上下巻購入するが、下巻は紛失（???）する。

<慶應本の特徴>

通常、ゲーテンベルク聖書は、通常、42行聖書だが、慶應本は、**40行聖書**である。

最初のページ（初刷り）の3行が赤で印刷されている。これは、ゲーテンベルクが最初から2色印刷を行おうとしていたことが伺える。



42行聖書

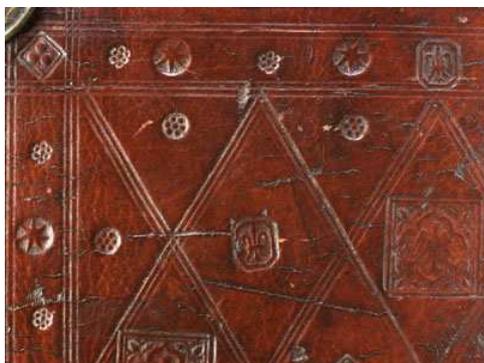


40行聖書（慶応本）

グーテンベルク聖書は、通常、42行聖書である。

<装丁の特徴>

表面が皮で装丁され、金箔を使わない空押し（革・厚紙などに、彫刻した金版《かなばん》を熱して強く押し付け、文字や模様を浮き出させる方法）の模様（ブラインド・スタンプ）が多数押されている。模様の特徴から、この本がマインツ（ドイツ連邦共和国の都市、ラインラント＝プファルツ州の州都）で装丁されたとされている。



カバーの空押し模様のひとつを拡大した様子

単頭の鷲の姿と思われる。

表表紙、裏表紙ともに5つの金具（ボス）が付いている。



金属のボス

このような金具は革表紙を保護するためのものであることから、この聖書は立てて保管するのではなく、教会の説教壇などに寝かせた

状態で置くことを意図したと思われる。

元来は、金属の留め金によって裏表紙と表表紙をしっかりとめられるようになっていたはずである。現在では、受け口の金属部分しか残っていない。



金属の留め金

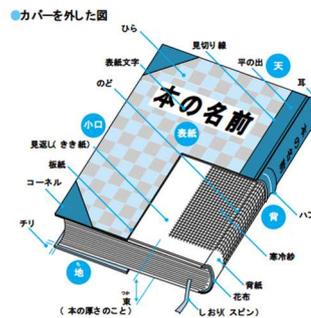
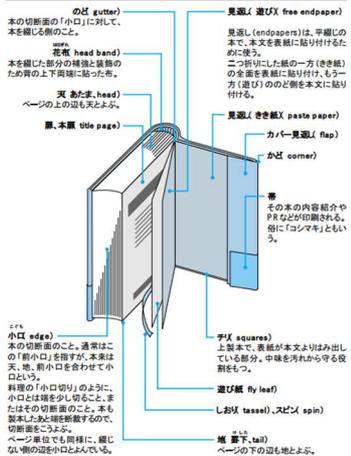
現存するゲーテンベルク聖書の中で、慶應本の装丁だけに見られるものとして、小口に付けられたインデックス用の革ボタンが挙げられる。



聖書を広げ、(前小口部分を)斜めから撮影した画像

インデックス (各書の冒頭を示す) 用の革ボタンの様子、および、紙が厚くてかなり強く波打っている様子がわかる。この聖書の革ボタンは、現在は4個しか残っていないが、元来は30個ほどあったはずである。この聖書には目次がないため、各書の冒頭ページに羊皮紙の細い切れ端を膠(にかわ)ではりつけ、そこに革で編んだボタンをつけて、冒頭ページを探しやすくしていたとされる。
革ボタンは羊皮紙片につけられている。

本の部分名称



聖書を開いてみると、表面に凹凸がある様子がわかる。



この理由として 2 つのことが挙げられる。一つには、活版印刷の前には鮮明に印刷するために紙を湿らせるものだが、後で製本するときに圧力を十分かけなかったため凹凸が残ってしまったのではないかと考えられる。もう一つの可能性は、特に端の波うっている部分に関してだが、長い間湿気が多い場所で保管されたためにページが強く波打った状態になってしまったというものである。